外国人の入国審査 円滑に

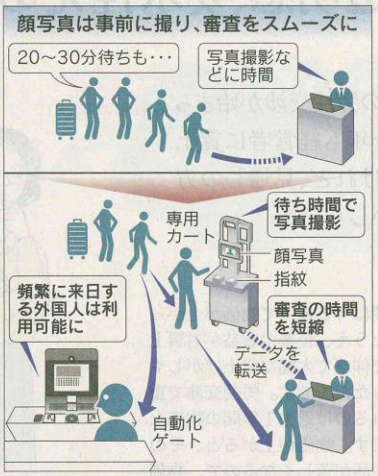
関空など今秋から

待ち時間に顔写真 自動ゲートも解禁

法務省は今秋から外国人が日本に入国する管理手続きを円滑にする仕組みを取り入れる。入国を審査するブースに向かう行列に並んでいる間に、外国人が自分で顔写真や指紋をとれる専用カートを配備する。頻繁に来日するビジネス客には自動審査ゲートの利用を解禁する。2020年の東京五輪・パラリンピックを前に外国人が短時間で入国できる環境をつくる。

顔写真を自分で撮る専用のカートは、まず秋から特に混雑がひどい関西国際空港のほか、観光客が急増している那覇空港と、審査スペースが狭くブースを増やせない高松空港の3カ所に合わせて約80台配備する。順次、設置する空港を広げていく。法務省によると、外国でもこうした機器を活用する取り組みは珍しいという。

専用カートは「バイオカート」と呼ばれ、可動式やモニター、指紋の読み取り機を設置している。提示した後に、指紋の読み取りと顔写真の撮影が必要だ。列に並んでいる間に各自が機器を使って撮影・読み取りを済ませば、時間を短縮できる。



成田空港第2ターミナルの入国審査場で審査を待つ外国人の長い列

自動化ゲートは現在、成田、羽田、中部国際、関西国際の4空港に置かれている。パスポートと指紋照合で本人確認すれば出入国できるが、利用は日本人と日本在住の外国人に限っている。この自動化ゲートの利用をビジネス目的で年間数回以上来日する外国人に解禁する。初めて入国する時に空港内で手続きをすれば、次回から自動化ゲートの利用を認める。

一部のビジネス客を自動化ゲートに誘導すれば有人ゲートを通る人が減り、行列の短縮につながる効果が期待される。

政府は14年に策定した観光立国実現に向けたアクション・プログラムで、入国審査に要する最長待ち時間を16年度までに20分以下に短縮する目標を掲げた。入国審査官の増員などを進めてきたが、成田、羽田、中部、関西の主要4空港の平均待ち時間は26・5分と目標を満たしていない。法務省は要員を増やすだけでは限界があるとみて、16年度に128億円を投じて手続きの円滑化を急ぐ。

15年の訪日外国人旅行者数は前年比47%増の1973万人と急増。政府は訪日外国人を3000万人超とする目標を見据え、都市部の主要空港に加え、地方空港でも外国人の入国管理が課題になるとみている。人材やスペースの問題で審査ブースの拡大は限界があり、無人で対応できる改善策を全国の空港に広げる。

日本経済新聞　平成28年2月22日